

政治学概論Ⅰ（2025年度）

授業の感想：第2講（12月17日）

氏名	Q1	Q2
安達悠人	福祉レジーム類型論において、日本が自由主義型と保守主義型の特徴を併せ持つレジームとして位置づけられている点、こたつ記事について	日本では公的福祉が限定的で市場や家族への依存が大きい一方、社会保障支出自体は少なくなく、保守主義型の特徴も併せ持つおり、日本の福祉が自助・共助を重視しつつ国家も一定の役割を果たしているということから「東アジア型福祉レジーム」として位置づけられることが分かった。また、こたつ記事について、知らないうちに印象操作を受けてしまう怖さを感じ、便利だからこそ受け取る側の意識がより重要だと感じた。
市場望友	社会的弱者は誰か、それはなぜか、という問い合わせが生まれない	「社会的弱者は誰なのか、なぜそうなるのか」という問い合わせが生まれない社会では、不平等であるということに気づきにくくなり、自己責任であるという考え方になってしまう。本来、制度や環境によって生じている不平等が問題として認識されず放置されるため、適切な支援や改善が行われない。この問い合わせが生まれること自体が社会をよくするために必要なものであり、重要な基盤となると考える。
今井朝陽	エスピニン＝アンデルセンの福祉国家論	福祉国家について考えるとき、単線的な思考ではなく、相互作用論的なアプローチを行い、類型化していく、というエスピニン＝アンデルセンの考えは、福祉国家に限らずに重要な型になるとえたからである。複雑に要因が絡み合う現代において、たとえば教育格差について、経済力と学力を直結させるのではなく、社会的な要因にも目を向けることなどが現代において大切であり、この考えと通ずるものがあると感じた。
大石将輝	高学歴バイアスやレッグス論が重要だと思った	自分たちは、国立大学を経て多くの人は教員になろうとしており、世間一般の中では比較的いい人生だと言われるような人生を送っている。その中で、社会には多くの立場の人がいるわけで、教員として子どもたちに教える立場としては自分の境遇のみで社会を見ることなく、より広い視野を持って社会を知り、どのような境遇の人がいるのかを理解すること、また子どもたちにどうすればよりよい皆幸せな社会になるか考えさせるのが教員として必要だと思ったから。

(continued)

氏名	Q1	Q2
尾崎優太	<ul style="list-style-type: none">・「大きな政府／小さな政府」という二元論では、各国の違いを説明しきれないという指摘・エスピニアンデルセンの三つの類型（自由主義型・保守主義型・社会民主主義型）と、その指標として提示された脱商品化・階層化・脱家族化・2000年以降、既存の類型を超えた再編が進み、「誰の意思が政策に反映されるか」が分岐要因になるという議論・日本の課題が「過度の再分配」ではなく、インサイダー／アウトサイダーの分断への不十分な対応にあるという点	福祉国家は「規模（大きい／小さい）」で単純に語れないという指摘が印象的でした。各国の歴史やアクターの関係によって制度が形づくられるという視点は、表面的な数値比較だけでは見えない要因を示していると感じました。また、日本の問題が再分配のしすぎではなく、分断への対応不足にあるという整理は、時刻の政策を考える手がかりになると思いました。
小野瑞樹	標準モデルじゃない人々は損をするように世の中がつくられているという点が重要であると考えた。	社会が標準モデルに基づいて政策を進めることでそこから外れた人々が不満を抱き、その声に応じた新たな政策が生まれても、また別の人々が取り残される。このような負のループが続くことで、標準から外れた人々が常に損をする仕組みになっていると感じたため、人々は社会に不満を持つのではないかと考えたから。
片山翔太	失業時所得代替率のサッチャーポリシーの話	個人的に新自由主義はかなり批判的に見ている。これにより、格差がひらき、希望が持てない社会になっていたと思う。特に日本では、自民党の自由主義的傾向が強く、自己責任論が蔓延し、希望が持てなくなっていると考えている。去年の政治学概論の最終課題でも同じようなことを書いたし個人の解釈、見方・考え方によるのかもしれないけど、自分は、この世界的な転換が格差の助長、希望を持てない社会にしたと考えるので、非常に重要な問題だと考えている。
兼清琴葉	選挙公約を比較してもほとんど意味がないという主張	選挙に行く際は公約を見るのではなく、過去の実績に着目して投票するように心掛けようと考えた。また、中高の生徒会長を決める時、公約を聞いたうえで投票していたけれど、ほとんど実施されることなく、何のための公約なのかと疑問に感じていたため、納得がいくとともに、政治の世界でも同様であることが印象に残った。さらにこのような学生時代の経験から、人々が選挙の際も公約に目を向けてしまうこともあると思ったので、教育の場から変えていくことが求められるのかなと感じた。
亀崎拓麻	「非専門家」が「非専門的」な事柄について語れないこと	私は、まだ大学生で教えられる側の立場だが、教員になったとすれば子どもたちに教える立場になる。そうなった時に授業の中で子どもたちは専門的な立場ではないため、発言がしにくいといった場面もあると思う。そんな中で教師である人はどのような働きかけを行うことで子どもたちの活発な発言を引き出すことができるのかと思ったから。また、自分自身が非専門的な立場のときに意見を言いにくこともあるので、その実態を身をもって理解できたから。

(continued)

氏名	Q1	Q2
河田陽菜	大きな政府と小さな政府の二元論の限界がある点。	イギリスとフランスの政府の体系の相違を説明できないことから、それに対応したモデルを作るべきといった点も含めて、今までの公共などで説明されてきた「大きな政府」「小さな政府」で政治に詳しくないからこそ特に気にせずそういうものだと思っていたので、この言葉では十分に説明しきれないという点でギャップを感じたから。
岸七星	みんなが被害者意識を持っているという現代社会の特徴	これが重要だと思った理由は、現代の不満や不安の広がり方をとても的確に表していると思ったからである。貧困層だけでなく、比較的安定している立場にある大企業の正社員でさえ、自分を被害者だと感じているという指摘は印象的だった。人々は絶対的な苦しさだけでなく、他者との比較や将来への不安によって不信感を抱いていると思う。その結果、誰が1番辛いかを競うような状況が生まれ、社会全体で共通の課題を考えることが難しくなっているのではないかと考えさせられた。この被害者意識の広がりは、現代社会を理解する上で重要な視点だと思った。
高坂知希	日本の経済状況を表す指標などを多様な視点からグラフを通して比較した点	グラフの見せ方や同じ国の経済を表す指標であったとしても、データの算出のしかたや、切り取り方、比較する国によってグラフ化したときに読み手に与える印象が全く異なっていたのが印象的だった。特に、貧富の差が大きいイメージの強いアメリカでは、短期的な失業に関しては保障が行き届いていたり、長期的なものには日本などと比べると保障が足りていないという点に、データの扱い方次第では読み手の印象操作を行うことも容易であると感じ、前回の授業や冒頭でもあった出版社による記事の考え方の傾向があるという平等な視点ではないことがさらに印象づいた。
小松原暖	「めぐって」：学者と政治家一行政官の立ち位置	吏員型官僚が増えているというところで、財務省などでは官僚の力が強いというようなイメージを持っていたので行政官が主導で行っているのかなと考えていたが、政治家に言われたことしかやりたくないと思っている官僚が増えていることが分かって意外だった。石破政権時に国民は減税を求めていた人が多くいたと感じていたが石破元首相は、現金給付を行おうとしており、これは不都合な真実を見たくないということなのかなと感じた。
角田実咲	エスピニアンデルセンの「国家にはさまざまなパターンがあるため、何らかの基準に照らして進度を評価するのは間違っている」という考えが重要だと思った。	特定のモデルに基づいて発展の優劣を評価するのは誤りであるという点は、これまでの教育を通して自然と理解できることであると思う。しかし、私の感覚では、インターネット上には今もなお、特定の国を基準にして優劣を論じる言説が一定数存在する。このような発想が一般的な議論の中で用いられ続けている現状を、改めて問い合わせ直す必要があると感じた。
泉水美夢	エスピニアンデルソンの3つの指標	エスピニアンデルセンは「労働力の脱商品化」「階層化」「脱家族化」という指標を用いて3つのレジームに分類している点が重要だと感じた。労働力の脱商品化は、福祉の手厚さや国家の役割を具体的に測る指標となる。これから、福祉の役割を貧困の救済としてではなく、市民の多様な生き方を保障するという考えであることがわかった。これを批判している『福祉政治学』の脱商品化こ指標が労使階級だけではないということにも納得した。

(continued)

氏名	Q1	Q2
西田圭吾	データから福祉国家論について考える	第一に、グラフを自分で作成することの重要性を再確認したため。既存のグラフは何かしらのバイアスがかかっているため、フラットな視点でデータを分析するためにも、自分でグラフを作成する能力の重要性を確認した。第二に、失業時所得代替率においてイギリスが他国と比べてかなり数値が低いことを初めて知ったため。イギリスでは、サッチャー政権を契機に、給付の位置付けが所得代替から最低限保障へと転換し、今日に至ることを確認した。各国の現状を把握するとともに、その背景や今後の課題などについての詳しく学び、考察していくことが大切だと感じた。
橋本夏実	複数の国家像があるという点が面白いと思った。	中学の社会科の授業で南北問題や南南問題が取り上げられたときに、先進国と後進国を比較して、後進国が先進国のように発展することが重要だと学んだ記憶がある。先進国が発展途上国を援助して産業や経済発展を促すことは必要だが、真似をするのではなく、その国の実態に合った支援が必要だと気づかされた。また、日本が外国で成功した方法をそのまま輸入すると日本では合わない可能性があるという危険性があると感じた。
長谷川隼	日本の社会構造を表で表した小熊モデルで、大企業の政治的発言力が地元型と残余型の中間であること	まず政治的発言力が地元型が強いというイメージがあまりわからなかったが、授業内の市議を選ぶ際の例で、あの立候補者は友達だからみんなあの人に入れようなど、地域間のコミュニティによって選挙に選ばれる人が決まってくるという部分があることを初めて知った。大企業は、政治の官僚が引退した時に、深い交流関係のある企業にいい役職を約束してそのまま職に就く、天下りがあるため、政治的な発言力は地元型より高いのかなと思っていたが、以外にもそうではなかったので驚いた。
引地優斗	エスピニアンデルセンの類型論 (1h30あたり)	自由主義型と社会民主主義型、保守主義型の3つの内容の解説があったが、それぞれ利点・欠点があるはずなのに、なぜか日本は上手くいっていないので、疑問に残った。これだと、サッチャーを尊敬する人が日本で多いのもなんだか理解できるような気がした。どの程度の不平等が許容されるのかといった考えは、国によって異なり、それが国家の政策にも反映されているのだと考えると、面白いと思った。
福田伸之介	福祉国家論：定義と変遷	過去の自分を振り返って、政治や福祉について考えるときに、どの程度の不平等は許容されるのかという視点が抜け落ちていたと思う。福祉国家という言葉に対して、その国のあるゆる不平等を是正するためという先入観があったので、前提を見直す機会になったと感じた。また、アメリカモデルの近代化の幻想のように、どのような国家の形であれ、何かしらの基準と照らし合わせて分析することが重要だと感じた。
前田修	専門化に伴い「非専門家」は「非専門的」な事柄について語れない雰囲気があることについて、「学際的」「領域侵犯的」な議論が重要であるという箇所	動画の話にあったように、自分が教師の立場であるときに子どもたちが自由に話すことが出来る環境づくりのために大切だと思ったから。ただ私は専門家が言っていることが必ず正しいと思い込むことも危険だと感じた。専門家一人一人で主張は当然ながら異なるため、様々な内容をしっかりと吟味したうえで教師として自分の考えを持ち、子どもたちに教科書の表面的な内容ではなく、本質を考えさせることは彼らの大きな学びになると思った。

(continued)

氏名	Q1	Q2
米江琳香	標準世帯モデルの限界	現代では、様々な家庭環境で育った子どもたちが学校とい う一つの場に集まるという構造になっている。日本の制度 は1960年代の標準世帯モデルに準じて作られており、近 年の日本の現実に即していないことから、この枠にはみ出 してしまった子どもたちが学校や社会で生活しづらい状況が 生まれていると考える。教師を志している一人として、新 聞やニュースなどを読み、社会の変化に关心を持ち、子 どもたち一人ひとりの背景や置かれている状況に目を向ける 姿勢を持つことが重要であると感じた。